

通算山行NO	No.個人山行	報告者	加藤 秀子
年月日	2005年8月15~17日(月~木)(快晴)	2万5千円=	
山名	和名倉山・和名倉沢(2036m)		
体力度=4・普通	技術度=登山は3・普通	藪漕=あり	三角点=三等三角点
コースとタイム	9日=下土狩13:00-雁坂トンネル三峰(泊)16:40		
標高差	上り・~=約m 下り・~=約m		
参加者と 一言	後藤隆徳(58)=長年の計画が叶いそうだ。 嶋本五十鈴(51)= 加藤秀子(55)=テン泊の沢は久しぶり。期待大だ。		

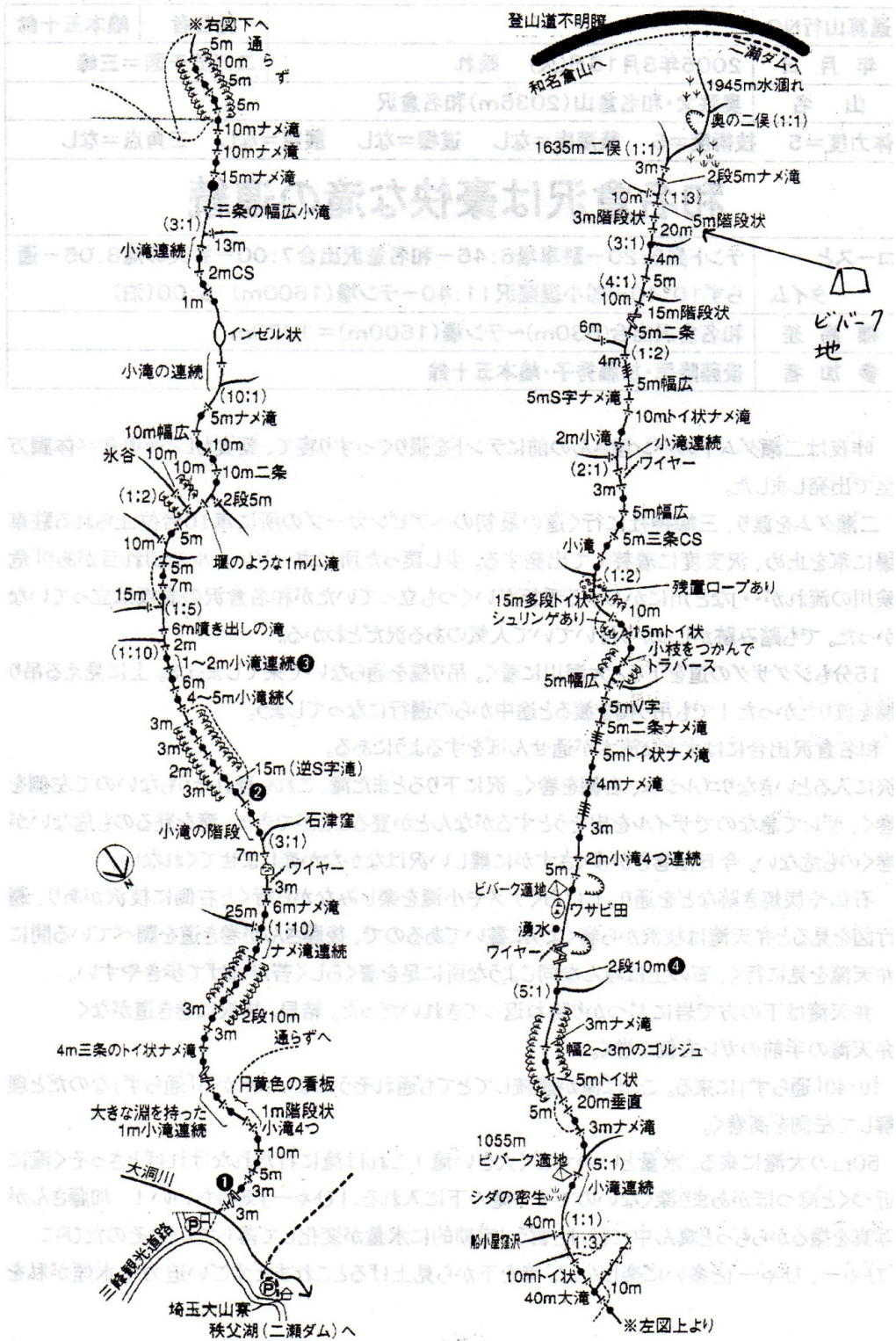
本当は14日から東北の沢に行く予定であった。ヤマメが手掴みでとれるという沢に飛び込んで、熱燗片手に塩焼きで・・・涎が出るような夢は、ああ～夢で終わってしまった。天気が恨めしいと言ってもしかたがないか。そして計画は、一日伸ばし奥秩父の和名倉沢に変更となった。それはそれで楽しもう！

予定通りの時間で富士ICを出発。渋滞にもあわず快適に雁坂トンネルを抜け九十九折の山道を飛ばす。三峰の部落でテン泊に良さそうな物件を下見しながら取敢えず、沢の下降点をチェック。又、引き返しゆっくりと、ああでもない、こうでもない屋根下を探すが、宿探し結構これが面白いもんだ。

あった。屋根あり。テントスペースあり。トイレあり。おまけにテーブル付きだ。三峰バス停の待合所に格好な場所が見つかった。一応近くのガソリンスタンドにお伺いすると、「いいんじゃない。」というおおらかな返事に、三峰の人達の株が急上昇。でも、建物の中は暑い・・・と、少しずつテントを外にずらしていたら結局、表に張ることになってしまった。

途中で仕入れた刺身の醤油がないという事で、近くの家飛び込み調達する。全く山ヤという者は何が起きてても生きていける。その夜は長々と語りながら、食事をし、久しぶりのテント泊を心ゆくまで楽しんだ。

満月の煌々とした灯りに、「う～ん。明日の天気はいいぞお、いいぞお～！」



個人山行報告書

通算山行NO		報告者	嶋本五十鈴
年月日	2005年8月16日(火) 晴れ	二万五千円=三峰	
山名	奥秩父・和名倉山(2036m)和名倉沢		
体力度=5 技術度=5 藪漕度=なし 道標=なし 展望=なし 三角点=なし			
和名倉沢は豪快な滝の連続			
コースと タイム	テント発6:20-駐車場6:45-和名倉沢出合7:00-弁天の滝8:05-通 らず10:40-船小屋窪沢11:40-テン場(1600m)15:00(泊)		
標高差	和名倉沢出合(530m)~テン場(1600m)=1070m		
参加者	後藤隆徳・加藤秀子・嶋本五十鈴		

昨夜は二瀬ダム下のパン屋さんの前にテントを張りぐっすり寝て、朝食もしっかり食べ体調万全で出発しました。

二瀬ダムを渡り、三峰神社に行く道の最初のヘアピンカーブの所に車10台位止られる駐車場に車を止め、沢支度に着替えて出発する。少し戻った所にガードレールの切れ目があり「危険川の流れが・・・」など川にかんする看板がいくつも立っていたが和名倉沢の看板は立っていません。でも踏み跡がしっかり付いていて人気のある沢だとわかる。

15分もジグザグの道を下ると大洞川に着く。吊り橋を通らないで来てしまった。上に見える吊り橋を渡りたかった！でも吊り橋を渡ると途中からの遡行になってしまう。

和名倉沢出合には大きな流木が通せんぼをするようにある。

沢に入るといきなりゴルジュ、右側を巻く。沢に下りるとまた滝、これも登れそうもないので左側を巻く。ザレて急なのでザイルを出そうとするがなんとか登ることができた。滝に登るのも危ないが巻くのも危ない。今日は巻きが多くさすがに難しい沢はなかなか楽しませてくれない。

石仏や炭焼き跡などを通り、しばらくナメや小滝を楽しみながら行くと右側に枝沢があり、遡行図を見ると弁天滝は枝沢から巻くように書いてあるので、後藤さんが巻き道を調べている間に弁天滝を見に行く、石の上はみんな同じような所に足を着くらしく苦がはげて歩きやすい。

弁天滝は下の方で岩にぶつかり跳ね返ってきれいだった。結局、枝沢に巻き道がなく弁天滝の手前のガレ右側を巻く。

10:40「通らず」に来る。ここは滝が連続してとても通れそうにない、だから「通らず」なのだと思っ理解して左側を高巻く。

50mの大滝に来る。水量といいすごく大きい滝！これは滝に打たれなければとさっそく滝に近づくと滝つぼがあまり深くないのですぐ滝の下に入れる。「ひゃー」気持ちいい！加藤さんが写真を撮るからもっと真ん中に行けと言う。定期的に水量が変化して落ちてくる。そのたびに「ひゃー、ひゃー」と多に楽しんだ。滝を下から見上げるとこれまたすごい迫力！水煙が私を

包み込むように落ちてくる。「わおー」歓喜のおたけびをあげる。

大滝も当然高巻き。すごいザレで石は全部浮いていて持つことも足を置くこともできない。だましまし押さえ付けるように登る。

大滝を巻き終わると船小屋窪沢の滝が現れる。ちょっと上に良いテン場があり、ここは平らで一面に丸くてかわいい苔が生えていてテントを張るには申し分ない所だ。昔は何かに使っていたらしく、かめ、一升瓶、苔むしたヤカン、ブルーシート等が落ちていた。ここでお昼にラーメンを食べる。沢では暖かい食べ物おいしい。

ここからはナメ、小滝の連続のはずだが大きな滝がありここを巻く。下り口がいやらしいのでザイルを出す。ザイルワークがいまいち解らない私は加藤さんの動きを見ていた。木にセルフビレーを取り、ザイルを木に固定して腰がらみでビレーする。

後藤さんはハーネスにザイルを結び降りていくと途中で何か大騒ぎをしている。両手をぐるぐる回している。「えっ！落ちるの・・・？」・・・「ザイルを早く出せ」と言っている。訳も分からなくザイルの途中で結んであるカラビナをはずした。そのうち静かになって音沙汰がない。

なんだったんだろうと私と加藤さんが下に降りて行くと後藤さんは遥か向こうにいる。ザイルを束ねてから後藤さんの所に行くと蜂に十数ヶ所刺されてカンカンに怒っていた。蜂の巣があったらしい。私たちは一匹も見なかったのに！

後藤さんは蜂の巣があるから急いで通り過ぎるから早くザイルをだすように言ったのを滝の音などにかき消されてわからなかったのだ。大変申し訳ありませんでした。

ここからはナメ、小滝が連続している。加藤さんは張り切って中央突破！おもしろいように行く。後藤さんも負けずに別ルートで中央突破！しばらく夢中で沢を楽しんだ。

上流に来ると苔がじゅうたんのようにつわつわつわして、水の中の石にも苔がびっしりついていて。こんなの初めて見た！それに滑らない。

15:00左岸にいいテン場を見つける。もうへとへとに疲れてこれ以上、今日は遡行したくなかった。ここにテントを張ることに決まり、さっそく濡れた服を着替えタープを張る。歪みもなくきれいに張れやっとならなうことができる。

今日の夕御飯はカレー、ごはんをお米から炊くのだが慣れないので水加減が大丈夫だろうか心配でずっと火のそばについていた。箸をふたの上に置き、ぷつぷつ振動がしなくなったらほぼ炊けた。ちょっと焦げのにおいがしてきたら火からおろしてひっくり返す。うまく炊けました。ごはんが美味しくてカレーが美味しくて食が進み良かった。

夕御飯が終わるともうする事がないので18時頃からシュラフカバーに入って寝るしたくをする。今日は初めてのツェルト体験、ほとんど外で寝るのと同じ。鹿に顔を舐められたらどうしよう、カエルが顔の上に跳ねてきたらどうしよう。心配でシュラフカバーの口をしぼって目と鼻だけ出して寝ました。

ワンポイントで一言・・・

蜂には参りました。沢の中では意思の疎通が難しいを痛感。それにしてもビレーが、、、。(後)

年月日	第2日目=8月17日(水・晴のち曇)	報告者	後藤 隆徳
2万5千図	雁坂峠・中津峡・雲取山・三峰		
山名	報告のコース=和名倉沢1600mビパーク地点—二瀬尾根—和名倉山—二瀬尾根—大洞沢		
今日の体力度=5・厳しい 技術度=4・やや厳しい 藪漕度=あり(笹が1時間うるさい) 道標=なし(地図読み必携) 展望度=悪い・和名倉山はゼロ トイレ=ない 携帯=×			
二瀬尾根は難しく面白い尾根だった			
コースと タイム	起床4:40—出発6:00—水溜れる7:00—二瀬尾根7:10—和名倉山7:40—戻る8:15—造林小屋跡9:15—石津窪(東大の山)の科尔10:20—石津窪—大洞川13:00		
標高差	上り・・・1600m地点～和名倉山2036m＝約436m 下り・・・和名倉沢2036～大洞沢550m＝約1486m		

2日目

昨夜は焚き火をしようと思ったが雨で薪が湿っていて結局ヤメた。疲れてもいたので早めに就寝。酒も一合半位だった。この辺は飲めないメンバーだと実に退屈になる。従ってシュラフに潜るのは早めになる訳だ。ただ、余り早く寝ると夜が長くて長くてかなわないのだが、、、

夜半に心配していた雨が降ってきた。タープがやや高めで顔に雫が当たるが無視し寝ていた。でも、明け方には止んで朝は青空に雲が流れていた。まあ、これで一安心である。

簡単な朝食が始まる。最近、昔のように朝食が進まない。昨夜はそれ程酒を飲んだ訳でもないのに、、、。パンと温かく甘いミルクとタマゴでも良いかも。(出来ればベーターベンも、、、だが) さあ、今日も戦闘開始だ。思い切って温かい衣服を脱ぎ、冷たい装備をサッと着込む。身支度を整えば出発。まだ、6時だ。

ここからは大きな滝はなく、絨毯みたいな毛足の長いコケが一杯の沢を行く。いかにも「奥秩父」を感じさせる所だった。あれほど誇っていた水流は次第に水勢を失い、水音も聞こえず、伏流になった。ここで「全装備解除！」を宣言し事実上、和名倉沢は終わった。そこは標高1800mだった。更に苔むしたフカフカの樹林帯を上るとヒョッコリ、二瀬尾根に出た。悪路で名高い二瀬尾根もこの辺は良く踏まれている。何故か右書きの「奥秩父山岳会 和名倉山→二瀬」の看板がある。

頂上まであと100m。少し食べて荷物を置いて、ゆっくりだらだら上っていく。将監(しょうげん)峠方面からの道と合った。少し下り開けた所で富士山を

確認。ここは唯一の展望場所だった。シラビソの中を少し歩くと和名倉山頂だった。ここは全く展望がない、展望「ゼロ」の山だった。こんな頂上も珍しい。以前、会でここに上っているが承知で来たのだろうか？こんな山はもう行く所がない連中が来る山と思うのだが、...

記念撮影後そそくさと下山。少しルートを誤った。再び荷物を背負い下山。暫くは快適だったが次第に背丈の高いササが両側から覆い被さってくる。しかもガスが立ち込め「霧シオン」がビジョビジョで始末が悪い。道はボコボコ・ガタガタ・ヌルヌルでズックのお二人は滑ること滑ること。時々、「ギャ〜、ウオオ〜、ギョエ〜」と嬌声を上げる。私は重たい思いで皮靴を持ってきたので一人ほくそ笑んでいた。(まあ、他人の不幸は楽しいものだ、...、ホホホ)

造林小屋跡に出る。ここから森林軌道跡を歩くのだがルートが分からず30分ほど右往左往する。多くの先人の記録を読むとここで迷っている。イメージでは地形に引っ張られ谷に沿って東に向かう感じだが、地図を良く観察すると実は北に進んでいた。冷静に少し戻り小屋跡前に上ると簡単にルートは開けた。

森林軌道跡に行く。軌道跡と言っても至る所で崩壊し酷い物だ。しかし、かつてこんな高所に本当に森林軌道があった！のだ。人間とは凄いものだ。このルートをもとに下ると車から遥かに遠いところに降りて後が大変だ。合理的な下降路を密かに案企する。2万5千図を良く見ると1369mの登尾沢ノ頭から東に「石津窪」と言う良い沢が落ちている。なだらかなこの沢を下ればズバリ入渓点に出る可能性がある。

森林軌道を「石津窪」のコルまで来るとそこには東京大学のバス停みたいな「山火事注意」の丸看板があり、下から良い感じの道が延びて来ていた。長年の「カン」で分かった。この道は「絶対出合いに下れる」と。後は実に順調で快適にグングン下る。時々、例の東大の「バス停」がある。しかし、東大農学部のこれ程立派な山がこんなところにあるとは知らなかった。(当たり前?) まあ、伊豆にもありますが、...

で、最後の急坂をガガガガ〜と下ると、お〜とと、何と昨日の入渓点にズバリ、ピンポイントで出たではありませんか！ブラボーでした。兎に角、暑い暑い、暑くてたまらないので三人は歓びとも雄たけびとも付かない「奇声」を上げて、そのまま大洞川に突っ込んで行ったのであります。

ひと言

加藤...笹藪で肩を毒虫に刺されその痛いこと、痛いこと。ピリピリと絶え間なく痛い。

昨日は CL がトップで蜂刺され、今日は私がトップで虫刺され。トップは辛いぞ！

嶋本...きつい沢でしたが、最後に大洞川に飛び込んだのが最高に気持ち良かった



登山人
山
山

山
山

山
山

山
山

千

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山